

サステナブルライフスタイル (2025 年 7 月)

2025 年, 家庭と社会のすがた

“多様化する勤務形態と個人ブースの効用”

あらすじ:

2025 年の新聞はインターネット購読が主流になり、新聞用紙の消費量は 2010 年頃の 4 分の 1 以下に減っている。タブレットパソコンの画面で見出しをタッチすれば記事が現れ、指示すれば音声で読んでくれる。自転車専用道が整備され、サラリーマンは自宅から最寄り駅まで自転車で往復している。サマータイムが採用されて、明るい夕刻の余暇活動が活発になっている。オフィス内ではパソコン通信が無線化され、通信ケーブルがなくなっている。IT 技術による遠隔会議の普及で出張回数が激減し、飛行機と新幹線のエネルギー消費量が減っている。

コアデイレックタイムの自由度

7 月に入って気温が高くなり、サラリーマンの大半が半そで姿になった。女性はノースリーブに、明るい色の軽いカーディガンをはおった人が多い。梅雨のまっただ中だから晴れ間が少なく、朝夕は小雨が降るので傘を手離せない。1 年でもっとも蒸し暑い季節なので、セールス関係者は夕刻のビアガーデンを楽しみに汗を拭きながら顧客を訪問している。

家電機器メーカーの営業部長を務める山川護さんは、午後から約 2 時間の定例会議を終えると自分の席に戻り、いくつかの販売代理店に電話して訪問アポを取り付けた。もちろんメールもできるが、護さんはアポ取りには電話を使うようにしている。その場で相手の都合を聞きながら調整できるし、多少は近況報告も含めて話をする方が、親近感が伝わるからである。なお、相手が不在の場合はメールで訪問の目的と複数の希望日程を伝え、返信を依頼する。アポが決まったあとは、自分のデスクで訪問先に持参する提案書と技術資料を用意していたが、いつのまにか退社時間に近くなっていた。ぼつぼつ「お先に」とあいさつして帰る人がいる。

護さんの会社には 4 種類の勤務形態があり、社員によって入社時間も退社時間も違う。総務部門と財務部門は、朝 9 時から午後 5 時までの定時フルタイム勤務が原則である。財務部門は金融機関との接触が多いので、勤務時間を業界の標準に合わせておく必要があるからである。総務部門は役員の秘書機能を果たしているのと、工場を含む社内全部門向けの支援業務が多いので、やはり固定的で安定した勤務時間が求められる。数ヶ所ある工場は、ほとんどが定時フルタイム稼働である。しかし、需要が変動するので繁忙時には稼働時間を長くし、休日にも稼働させることがある。一方、従業員は交代勤務があるので、フルタイムでも人によって勤務する時間帯が異なっている。

2番目は拘束時間に柔軟性のあるコアタイムフレックス勤務で、朝10時から午後4時までがコアタイムである。現在、護さんも含めて営業部門と技術部門を中心に、工場勤務者を除く約5割の社員がこの形態で勤務している。3番目は勤務時間だけでなく、勤務する曜日にも柔軟性があるコアデイレックス勤務で、コアデイは月水金の3日間になっている。あとの2日間は土日も含めて出勤する曜日を自分で選択できる。個人依存度の強い業務を担う調査部門や企画部門に多く、工場勤務者を除いて2割程度の社員がこの形態で勤務している。フレックス勤務社員の勤務時間数は、定時フルタイム勤務者と同じ月150時間が標準で、このほかに125時間と100時間のオプションがある。勤務時間数が少なければ給与も少なくなるが、業務の都合と個人のライフスタイルがマッチすればこのオプションも選べる。このため小さい子供や介護の必要な親と同居している社員に歓迎されている。

SOHO(在宅勤務)の省エネ効果

4番目はSOHO (Small Office Home Office) と呼ばれる在宅勤務形態で、勤務時間数も勤務場所も拘束されない。だからオフィスには本人専用のデスクを用意しない。1人ずつ会社と役務提供契約と機密保持契約を結び、関連部門と業務分野、および時間単価が決まっている。担当業務はある程度の専門性を必要とする仕事で、リピートは多いが定常業務より一過性の性格が強く、他の勤務形態に比べると繁忙の差が大きい。SOHO社員は自分の得意な領域で職能を発揮するのだが、評価が低いとリピートオーダーを貰えない。だから、能力評価が確立している専門職の技術者に向けており、キャリアを積んだフレックス勤務社員がSOHO勤務に転換するケースが多い。昔なら「腕のある職人」に相当するのだが、プロダクトは「物」ではなく、設計書や報告書のような「文書資料」が中心である。護さんの会社では工場を除く社員の約2割がSOHO社員で、特許関連、翻訳、市場調査や技術調査、製品設計、設備設計、技術文書作成、広報資料作成、教育研修など幅広い分野を担当している。

SOHO社員は在宅勤務が中心なので、原則として自宅にデスクと情報通信機器を備えた執務環境を確保する必要がある。会社の関連部門とはいつでも連絡が可能で、コンピューターを通して書類を送ったり受け取ったりする。自宅だから会社のオフィスより自由に執務空間を作れるのが長所で、多くの人が壁に好きな絵や写真を飾っている。AV機器も備え、気分転換に音楽を聴いたり、テレビを見たりしている。時間が許せば昼間の時間帯に専門学校に通い、早朝や深夜に仕事をすることもできる。自宅に十分な執務スペースを確保できない人は、自己負担で近所にオフィスを借りてもよい。住宅地の駅の近くには、そうしたレンタルオフィスがいくつもあって、空調や電話設備のついた個室と、パーティションで区切られただけのブースを貸している。SOHO勤務は、パソコンと情報通信機器の発達で始めて可能になった新しい勤務形態である。社員の自由度を高めるのに大きく貢献しており、生産性の向上にも寄与している。一方、勤務態度や熱意が評価されるのではなく、プロダクトや成果でしか評価されないのが、社員には自立した職業意識とプロとしての職能が求められる。SOHO勤務は独立性が高いが、1社の仕事だけでは不安定なので、複数の会社と契約することも認められている。したがって会社に「所属」する社員という

よりは、独立した個人事業者の性格に近い。自由度が大きい反面、求められた業務を期限内に処理できなければ、その業務が他の SOHO 社員に回され、リピートオーダーを失うリスクがある。SOHO 社員は会社に本人のデスクがないが、会議や打合せに続いて数時間の作業が必要な場合もある。そうしたときのために、会社は SOHO 社員なら誰でも使えるフリーデスクとロッカーを用意している。

SOHO 勤務は通勤時間の損失を減らすのに貢献しているだけでなく、オフィスのエネルギー消費量を減らす効果も発揮している。でも、オフィスでのエネルギー節減量は、その半分ぐらいが自宅オフィスでの増加で相殺されてしまう。一方、通勤に要するエネルギーは大幅に減る。これらの削減分と増加分を総計すると、800 万人が SOHO 勤務者になっている 2025 年には、2010 年に比べて石油換算で約 230 万キロリットル分の省エネルギー効果を発揮している。通勤者が減ったおかげで交通の混雑が緩和され、護さんの乗る電車も 2010 年頃は座れなかったのに、2025 年には座って本を読めるようになっている。

オフィスは大部屋に個人ブース

日本のオフィスには伝統的に二つの特徴があった。一つは大部屋方式で、もう一つはデスクの島型レイアウトである。大部屋方式が情報の共有化とコミュニケーションに優れていることは間違いない。したがって部門単位で社員が同じ業務を共有し、密接に協力しながら遂行するチーム仕事に向いている。それに小部屋方式よりオフィススペースが少なくすむ。一方、他人の会話や電話まで耳に入るので、集中力を阻害するマイナス面がある。このため、コンピューターソフトの開発や文書作成など、個人依存度の強い頭脳労働にはあまり向いていない。デスクの島型レイアウトも日本の特徴だったが、このレイアウトは仕事の内容より「仕事ぶり」を管理するのに適している。部や課の単位で長方形の島を作り、管理者だけが島の直角方向を向いて座るのは、工場で監督がベルトコンベアの端に立ち、並んで作業している工員の作業を監督していたのに似ている。歴史的に見ると生産工場ができてから、その事務処理のためにオフィスが生まれたのであり、オフィスのレイアウトが工場のコンベアラインと似ていても不思議ではない。

ところが 2025 年には日本のオフィスレイアウトも大きく変化している。オフィスビルの増加でスペースにはかなりのゆとりが生まれたが、大部屋方式は情報の共有化とコミュニケーションに優れているので存続している。しかしデスクのレイアウトには、もはや島型が見られない。仕事の管理は、「仕事への態度」や「仕事の方法」で監督するプロセスコントロールから、「仕事の成果」を管理するプロダクトコントロールに移行しているからである。仕事はチームワークより個人依存度の強い業務が増大し、定常業務の比率が低下している。このため個人の生産性を高められるブース型レイアウトが主流になっており、通常は各ブースに情報機器とキャビネットや書架が備わっている。短時間の簡単な相談もできるように、来客用の椅子も備えられている。

人感センサーによるスイッチオフ

護さんの会社ではブースの隅にロッカーがあり、いつでもカジュアルウェアから来客用のフォーマルスーツ姿に着替えられる。執務中の服装は男女とも自由だから、もうユニフォームみたいな地味なスーツ姿の集団は見られない。男性もおしゃれになっていて、カラフルなワイシャツにネクタイ姿もあれば、スポーツシャツの胸元にネックレスが光っている若者もいる。護さんもカジュアルウェアにノーネクタイでよいのだが、ネクタイ姿が好きなので、通勤途上も執務中もカラーシャツにネクタイ、それにブレザーコートを着用している。服装は自由だが肌の露出が大きいタンクトップや茶髪などは、ゆるやかな服装コードで規制されている。

パーティションで仕切られたブースの広さは約 20 平方メートルで、2000 年頃の一人あたりのオフィススペースに比べると 2 倍以上の広さになっている。照明はブースごとのタスクライトが明るく、部屋全体を照らす天井のルームライトは少し暗い。騒音が集中力を妨げるので、吸音効果の高いパーティションとカーペットが採用されている。電話の着信は音だけでなく赤色点滅でも知らせることができるから、着信音のボリュームを小さくして使う人が多い。電話機にはテレビカメラもついているから、画面で相手の顔を見ながら話すこともできる。ただし、まわりに人がいないのをよいことにラフな格好で仕事をしているときは、カメラのスイッチを切るのを忘れてはいけない。各ブースには人感センサーが付いていて、人が不在になると 30 分後にタスクライトを自動的にオフに切り換え、パソコンをスリープモードにする。空調はブースごとに調節が可能なコントローラーがあり、人が不在になると一定時間後に自動的に電源が切れる。各フロアにある飲料の自販機や給茶機は、3 時間の利用がなければ電源が自動的に切れるので、正月や連休に無駄に電力を消耗することがない。



(イラスト：海老原ケイ)